

律法集のようなレビ記。穢れや浄めの規定は、私たちにはまるで馬鹿げて見えるが、こと人権に関する掟は実に手厚い。

労働者や障がい者など弱者の権利(レビ 19:13~14)、中立公正な裁判(19:15~16)、そしてイエスが引用したことで知られている「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい(19:18)」という愛の戒め。

そしてこれら掟の後には、「わたしは主である(19:14,16,18)」という但し書きが付く。つまり神の権威をくり返し示して、人間同士の約束や戒めをしっかりと守らせたのであろう。

イエスは、手厚い人権を色褪せさせるような驚くべき戒めを求めた。「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(マタイ 5:44)」。

隣人を愛すつもりが敵まで愛せとは、そりゃ無理、愛をそこまで拡大させるのか。隣人を愛し、見知らぬ人を愛し、遂には敵をも愛して世界を愛で満たせというのか。

「世界は家族」という愛の呼びかけなら、競艇の親分も唱えていた。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」というイエスの言葉は、山の上で弟子たちに語られたもの(5:1)。

インド独立の父ガンジーは、教義に捉われた教会には否定的だったが、イエスの山上の説教には影響を受け、自らの思想や運動に取り入れたらしい。非暴力運動の目的の一つに次のような定めがある。

「敵対者を打ち負かし侮辱することではなく、敵対者の友情と理解を勝ち取ること」。

イエスの「敵を愛せ」という戒めは、愛することで敵対者を、敵でなくしてしまうためのものか。そうとも言えるし、そうではないとも言える。前者の「愛」は、対峙する相手に敵であることをやめさせてしまう積極的な無抵抗。

ガンジーの時代、多元的な宗教とカーストで階層化されたインド民衆の段差を愛で結び、一致した非暴力で英国に立ち向かった。

また人種差別が先鋭化した米国では、黒人と白人の兄弟愛を唱えたキング牧師らの非暴力運動の成果は大きかった。「敵を愛する」ことで国内の敵は減ったが、米国は「神の義」を掲げ、中南米の自主的な思想を敵に見立てて暗躍した。

後者の「愛」は、どういうものであろうか。パウロは記している。

「敵であったときでえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われているのはなおさらだ(ロマ 5:10)」。

私たちが神に敵対しても、御子の死(十字架)によって和解させてもらったのだから、御子の命(復活)に与って救われるのは当然の理だ、と。目覚めた弟子たちは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい(マタイ 5:44)」という戒めを負いつつ教会を建てていった。

キリストの死で和解(罪が赦され)させられ、キリストの命で救われている(死に打ち克つ永遠の命)ことを、すなわち私たちの内に起こっている真実を、私たちの外に現わしていく。それが「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」ことではないか。

それは私たちがイエスのように「天の父の子となるためである(5:45)」。おこがましいが、なぜか私たちはそれほどまでに愛されている。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる(5:45)」。これが真実。

「敵を愛する」。到底不可能に思えるが、私たちの内に起こっている真実を表すことには望みあり。



《おまけのひとこと》

愛された者は愛することができる　　そうであれば　神の敵であった私たちが神に愛されたのだから
私は私の敵を愛することができる　　戴いた恵み分までは無理にしても　借りはできる限り返したい